

芦田惠之助先生と私

— 拝受した書簡を中心に —

青 木 清 吉

私は今芦田先生についての記憶をたどってみても、「同志同行」を読む以前のことはどうもはっきりしない。

だが、芦田惠之助という名前は知っていたにはいたのであった。その頃の私は、その人について大いその肩書で評価してしまう程度の人間であったから、毎月読んでいた「国語教育」（保科孝一主幹）で、「を式かで式か」というお説を読んだり、「教壇行脚より帰りに」という文に接しても、又「孔明」の授業記録が出た時でさえも、一世紀昔の人のものとして別に気にもとめなかつたようである。

だがたしか、昭和八年の夏でした。松江の町へ出て、偶然に友人中沼郁君に会い、さそわれるまゝに同君宅を訪れました。たまたま机上に「同志同行」という雑誌があつたので手にしてみると、一寸見たところだけでも、何となく他の雑誌とは違つて、あたたかい血の通つていゝような感じをうけました。早速帰途本屋に寄つて注文しました。こうして私は昭和八年九月号から「同志同行」の読者になつたのであります。その雑誌の広告を見て、「垣内先生の御指導を仰ぐ記」を求めて読むに及んで、私の心は何とか一目お目に

ゝりたい。子どもをご指導なさるご様子を是非拝見したいとの熱望ともいふ程の憧れを持つようになりました。

私はかつて、ある高等師範付属小学校の著名な先生の授業を參觀しながら、ノートを取ろうとして止められた経験を持っていました。然るに、芦田先生程の大家が、日本の国語教育理論を打ち立てられた垣内先生の前に、すっぱだかになつて授業をやり批評をうけ指導を仰ぐとされる求道的態度。その上、立案の経過を細々と記してあるあのたつた四十五銭の書物ではありましたか。私はあの書物を読んでから、人間の生きる道の尊さを教えられたのであります。

こうして、待ちに待った日がついに来ました。忘れもしない昭和九年七月二十七、八、九の三日間、岐阜県恵那郡大井小学校での講習会でした。（この頃はまだ教壇修養会という名は使われていませんでした。）この時のご指導は、読者が「石安工場」であり、綴方修正の文が「道ぶしん」というのであつたし、垣内先生のご講演の題が「沈黙の深層」というのであつたことも、今なお鮮烈である。

こうして、越えて昭和十一年の夏休みには、岐阜県大垣、兵庫県

揖保郡小宅^{おびす} 淡路島の志筑と三日ずつ三ヶ所お伴をしたのであった。

こうして、いよいよ思慕はつのもつて、どうかして、私の学校へもおいでいただいで、ご指導を得たい。又先生の書もいただいで、これを仰ぐことによつて、ともすれば怠惰に傾きがちなのが心を、むちうちはげましたいとひたすらに願ひ続けたのであった。

その頃いただいたお便り（九月十二日付）

御状も紙もたしかに落手

明年第一学期には必ずいきます

書は十月一二日頃に書いて送

ります同志の諸兄によろしく

校長先生にも

日々に大道の坦々と開け行く

のおもしろい 頓首

十二日 於掛川 直

青木 学 兄 侍史

続いて （十月二十九日付）

小宅に来て兄を思ふ

揮毫忘れているのでは

ないがいがしその中に。

来年五月のはじめか四

月下旬に山陰を一走り

する

このようにして、私どもはひたすらに昭和十二年春を待っていたのであったが、たしか四月はじめてであった。（この便箋は黄檗山万

福寺のもの）

青木兄

十二日釜山の

上陸を今朝

鮮から強

要して来ました

山陰迂回はふ

可能となつて

来ました 夏に

四日

この手紙で又失望しながらも、夏に備えて懸命の精進を同志と続けていたのであった。

ところが、六月十五日付で

拝啓

再度の御状多謝

どう工夫してみても

島根をかける時間を

見出しかねる、又々

食言 これでは国語

の威信地におちてゆゝし

き一大事ながら十一月

二十二日頃 朝鮮へ

の途次に必ず御地に

まゐります

一日富田城跡を見

て

同志冲垣寛君を
同道する予定

許したまへ
頼首

六月十四日 恵

青木学兄 侍史

かくて、夏休みに予定していた国語の講習会の予定に大変更を来
さざるを得なくなり、岩瀬法雲さん一人に来てもらって教壇修養会
を行なったのであった。

あたかも日支事変が起つて、毎日応召兵士の見送りが続き、教員
も児童も困をあげてこのことにかゝらねばならず、身内の者に応召
者があるなど極めて複雑な空気の中にこの講習は進行したのであつ
た。

だが、こうしたあわただしい中に進められたこの会ではあつた
が、今なお忘れ得ぬ思い出がある。それは数人の同志で講師岩瀬法
雲先生の授業を記録しておいたのを、午後総合整理し、それをがり
版印刷して、夕食後合宿している会員に配布して授業研究を行なつ
たことである。その記録は未熟なものではあつたが、それを手がか
りとして記憶を呼びさまし、研究に時のたつのも七月末の暑さも忘
れた、あの楽しさは、私の生涯における最もなつかしいものの一つ
である。

このようにして夏がすぎた九月十五日附で次のお便りをいただい
た。

久潤平に

十一月九日の晚島

根にはいつて十日

に三日月の影を訪

ひ十一二日兄の学

校で壇に立ちその

晩米子までも出

ておいてその翌岡山

に越さう

と思ふ御都合如何

折返し御一報を

こふ

九月十五日

恵 雨

青木学兄 侍史

十月十五日までは神奈川県愛甲郡玉川温泉友松庵に

全く待望久しいお便りであつた。この一枚のお便りが欲しいばか
りに、今からいふもおかしいが、頑固な校長も説得して受け入れ態
勢を作ったことなど想い起すと、夢のような話でもあるし、よくぞ
やったなどと自分で自分をほめたりしてなつかしんでいる。

ところが、この日程でよろしゅうございますとご返事を申上げる
と、

拜啓早速御状

多謝十月下旬北

越から押していくのだから

日時の確定はちょっと

ま。って。同志同行

十月か十一月号に発表

する日程ですべて計

画してちょうだい冲垣

君をなるべくつれて行く

九月二十一日 恵 雨

青木学兄 侍史

前便にあつた「三日月の影」というのは、井上尅先生が小学国語読本にお入れになつた教材で、山中鹿介が滅び行く主家尼子家の再興をはかつて悪戦苦闘して甲部川の渡して、毛利勢に討たれて終るのであるが、尼子氏の本城は、島根県能義郡広瀬町にある富田城とも月山城ともいわれる要害の城である。その上この広瀬は、井上先生の出身地である。してみると、私としては、失礼がないように受入れ態勢も整えておかねばならぬ。今の私ならば大したことではないが、何分数え年三十一才の私としては、容易ならぬことであつた。日程が早くきまらぬことには、先輩にお願いするのに本当に困つたのであつた。(先生はこんなおせっかいは好まれなかつたのであるが、それは大分後になつてわかつたことであつた。)

だがとにかく十一月十日夕刻、山陰線荒島駅で先生をお迎えし、広瀬町で一泊。その夜は大変な雨風になつた。

朝起きるとそれこそ台風一過カカリと晴れたよい天気であつたが、昨夜の風雨で毛利勢が拠点とした布部山城趾へは途中落石があつて行かれず、待望の月山城趾にも、一面の草は雨にぬれて登れそうもない。いたし方なく城趾の下の道をグルッとまわつて、はるかに仰ぎ見るよりいたし方なかつた。私はせつかくいらつしやつたの

にと残念があると、先生は「いや人間は決して無理をするものではない。今日登れなかつたら、この次という楽しみが残るから。」と淡々としておられた。だがそのあとで、「君は『三日月の影』を教える時に、この城趾をどのように説明するかね」といわれた。とつさであつたので、「さあ。」と申し上げていると、「私なら、尼子の月山城へ行ってみたが、とても攻められる城ではないね」というだろう。そうすると、子どもたちは、自分の経験に照らして、あんな山であろうか、いやこんな山かも知れないと、想像をたくましくするだろう。こゝに、私のいう単純化があるのだ。」と教えていたのだ。

続いて、十一、二両日は私にとって最も記念すべき二日間であつた。私の尋五男の組に「足助次郎」をご指導いただいたからであつた。

この夏の岩瀬法雲先生を露払いとして、十一月の芦田先生のご指導で、この地方に大変な反響を呼んだのであつた。先ず第一番が、この日来会された江津小学校校長三浦汎愛先生が是非共と二日間ねばりにねばられて、ついに、翌昭和十三年二月「釈迦」を二日間という約束をとりつけられたことであつたし、又一方ではやがて今市町小学校吉田定善校長を中心として「出雲恵雨会」の誕生となつてあらわれたことであつた。このため島根と芦田先生のご縁は一年一年と深く濃くなつて、石見にも「石見恵雨会」が生れるに及んで、毎年のようにご指導をいただく機会に恵まれることになつたのであつた。その勢は全くそれこそ燎原の火とでもいう勢であつたらしく、私はしばしば芦田先生や吉田先生に、放火犯人だなどといつてほめられたりからかわれたりもしたものであつた。

十二日の会が終わってから、その晩は玉造温泉「松の湯」でお泊り願うことになり、お伴をしたのが、島根師範付小の国語部員であった、中沼郁、飼牛勝寿の両君と私の三人。夕食はにぎやかにそれこそ水入らずでいただいで、多年待望の書をお願いすることになり、先生はお休みにになり、私も三人は硯に墨をたっぷり、中沼飼牛両君は帰宅したのであった。翌朝は早朝起床、先生は今朝はとも愉快だとたくさん書いて頂いたので、同志の希望にこたえることが出来た。私がいただいたのは、「坐即道」という横額と「坐而悟道」という軸であった。ちなみに、先生はこの頃「静坐と教育」をお書きになっていたのであった。

揮毫が終わって一風呂浴びてさあご飯となった時、先生が、「おい青木君一本やろうじゃないか。ほんの一本。」とおっしゃった。私も酒は好きではあるが、まだ若いし、朝の一ぱいなどはその味を知らなかったから気もつかなかった。だが、先生のご様子は本当にうまくてたまらぬといった風であった。そうしてすぐほんのりと顔をお染めになって、「よかったのう青木君」とくり返しくり返しおっしゃって下さったのは今も忘れられない。その後度々私の家では先生にお泊りいただいたが、いつも先生はご自分のおからだに合せてお酒をお上りになるので、私はいつも家内から、お酒の飲み方も芦田先生に習いなさいとたしなめられたことであった。

十一月十三日朝松江駅で先生をお送りした者は、付属の中沼、飼牛、中島の三君と私の四人で、先生は岡山県の院の庄あたりへおいでなる筈であった。

このあとすぐいただいたお便り

拝啓とんだ迷惑
を兄にかけた平に

々々しかし島根

はうれしかった島根

は線が太い二月には

是非江津であひたい釈迦

の一世一代をお目にかける

校長様によるしく

同志諸兄姉に

よろしく

恵 雨

難忘玉湯之一夕

十一月十四日

於久田

青木学兄 侍史

続いて十一月十八日付お便り

御状多謝 明

年一月末か

二月始め 兄

を江津に見

ること楽し

島根は実によい

感じてした島根

の教育は兄等の

手によって必ず

興隆するだら

う楽し出雲の国だ

さすがに 十一月十八日

惠

青木君 侍史

皆様によく

又私が出雲民芸紙の封筒をお送りしたのに対して十二月二十七日付で

出雲の人は神性

にとむか今朝封筒

が一枚もなくなること

を数日前に知ら

せたまひしぞお

そろしき百枚あれば年

内はいくら書いても十分江

津へいらっしやる頃幾枚か

恵みたまへ御礼

はいづれ都に帰りまし

て後壮健無類 御安意あれ

十一月二十七日 惠之助

青木学兄 侍史

出雲民芸紙が餘程お気に入ったと見えて、この後もいろいろなものをこちらからお送りしたり、たのまれてお送りしてよることのできたのであった。ちなみに先生のこの頃の服装は紺の詰袷服、茶のソフト帽子に、茶皮のトランクといういでたちで、やあとにっこり駅にお降りになるのが常で、切符はいつも赤の三等であった。

昭和十三年一月五日のことであった。私は松江に中沼郁君を訪ね、正月のお酒をよばれて二人は大いに島根の教育、国語教育を語りあったことであった。誰がいい出したことであったか忘れてしまったが、今年には井上先生のサクラ読本が完成する年だから、島根出身の井上先生の偉業をお祝いもし、かつは島根の教育に活を入れる

ような記念事業をしようではないかということになった。こんな話になると、何分にも血の気は多いし、酒の気はまわってはいいるし、二人の間ですぐさまってしまった。そこで、私が芦田先生にお願いするということにして、その日は大いに飲んで氣勢をあげたことであつた。この計画というのは、秋になって読本が十二巻完成した時に、垣内、井上、芦田の三先生をお招きして、小学国語読本完成記念国語教育大会を松江で、然も島根師範付属小学校が中心となつて開催しようというのである。(こんな大事業を三十才あまりの二人が相談してしゃにむに押しまくるのだから大した者といえは大したものだし、校長ともなれば爆弾をかかえているようなものだったろうと、苦笑を禁じ得ない。)

早速芦田先生にお願いしたところ

恭賀新年

はりきつた出雲の初

便まづもつてうれしい事代主

の末葉はかうしたものかと敬服

老生が一策をさづける志か

し手紙では要を得ぬ江津

へ来い必ず成立させる垣

内先生の御選磨井上先

生の読本御完成じゃないか
十日の夜神田の花月で

惠雨会幹部

の垣内先生の祝賀

会さ井上先生も御来

会の筈そこ

で一つ口を切って見る

広田外相氣取で。

しかし青木兄、垣内

井上両先生を引張ると

なると師範

の全校が一つにならな

いと何分大物だから

だめよそれは中沼兄によくいつておけ

一月八日

青木学兄 侍史

頓首
惠

この便りは私の手紙をご覧になるとすぐ、書いて下さったもので、何としても感激の極みであった。

このお便りを追い打つようにして次の二通を同時にいただいたのであった。

拜啓 島根出身

の井上先生を郷土

に名をなさしめ有終の美

をなさしむるが島根人の務

ぢやないか山中公を

かくて葬ったのもこれだ

私も兄も山陰の産この

根性がつらいね

頓首

一月十日

惠

清兄 侍史

哀願了承

いづれ江津で

頓首

一月十日

惠 雨

青木学兄 侍史

けふ垣内先生の

還暦祝賀会

何とありがたいお便りであろうか。これもあたたかいわが老師、

芦田惠之助先生のおかけと、中沼兄ともどもに感泣したのであった。

だが感泣ばかりはしておられない。付属小学校内は中沼君がま

めるとしても、あとをどうするか。

ところが、私どもにとって大変都合なことがあった。それは、

当時島根県教育会主事をしておられた方に並河亮次という先生があ

ったことであつた。(今頃はこうした組織はないが、戦前にはこう

した会が各府県にあり、中央には、大日本教育会というのがあつ

た。島根県の組織は幼・小・青・中等の各校教職員全員と有志の方

をもって出来ていたように思う。この並河先生という方は、とにかく島根の教育を振興せしめるには、青年教師を育てねばならぬというお考えで、私どものような血の多い青年を集めて、真教育研究会というのを年数回ひらいたり、又一身上の問題等についてもよく面倒をみて下さる方であった。(私と中沼君は、並河先生に相談したのであった。ところが、並河先生は能義郡広瀬町の出身で、いかなれば、井上超先生の同郷の先輩である。そうした関係もあつてか、それは一大快事ともろ手をあげて賛成して下さい。そうして、中沼君には、とにかく付属小学校内をカッチリ固めよ。その上で、垣内先生には師範学校長から正式にお願いするのがよい。又井上先生には、自分が旧知の間柄だから、交渉しておいて、県出身の文部省の編修課長だから、これは学務部長からお願ひした方が最もよい。この方も、又師範学校長にも自分が万事よくはからつて進行してやるから、お前たちは、研究方面や現場的計画を十分やれ。お金のことも全部引受けてやるから、大いにがんばれと、こちらが激励されて帰つたのであった。

當つて碎けよ。とはよくいうことであるが、これだけの大事業を青二才二人が首へびにおじずとか、独断で進行したのであったが、よい師や先輩にいだかれて万事好都合に行つたのは、全く奇蹟という外はないだろう。

このようにして、このことは着々と進行し東京とのことは、垣内、井上先生に関する限り上層部でやってくれることになつた。世に下請けということはあるが、私どもがやったのは正に逆の上請けとでもいふべきことに属しようか。

この頃は、私は又夏休みの教壇修養会のことを計画していた。そ

れは芦田先生を中心に、岩瀬先生、それに、その頃しきりに「おさらへ復習」を唱えておられた古田先生をと計画してお願いしたので対して。尚この時は隠岐へも是非とお願ひしたのであった。というのは盟友中沼君は、隠岐出身で、たしか彼の曾祖父かに當る中沼了三は、明治天皇の侍講をつとめた人であり、死ぬまでチョンマゲを切らなかつたという話の残っている人である。そうした関係で、中沼君は私財を投じてでも、是非隠岐行をお願いしてくれというのであった。

御状拝見愚老も健

全御安意をこふ

夏 今市の分よし

隠岐も行きたいが

七日は一寸むつかし

からう

この度の移動に見は

別条なきか

明日出発東北から九州 とを察知しておられたためらしい)

かけて七十五日の旅

岩瀬古田同行おもし

ろし しかしまり多く

をのぞまぬがよし 地本

の同志の活動が却つてよい

ではなかるうか

こゝに一寸御願ひ申したき

ことあり といふは

「惠雨教壇」 定価二円

が少々見込ちがひでまだ

新本が二千五百あるといふ

反古にしようかとこの間店

の者がいふからをしいと申し

てとめておいた

一冊 五十銭でよし

一冊でも二冊でも兄と中沼

兄等相談の上処分してく

れないかそれでも二千五百

売れたら同行社がたすかる

のだ 乍序 同行社に新し

い芽が出かけた 事情は

この夏お目にかゝって親しく

頓首

三月三十一日 惠 雨

青木学兄 侍史

同志同行社の書物は、当時として全く安いと思つていたことであつた。ある時先生にそのことを申上げてうかがつたところ、普通出版社は定価を実費の四倍につけるそうだが、同行社は三倍につけるのだとおっしゃっていた。昔とちがって書物は出来るだけ多くの人に読んでもらわねばという先生のお考えから出たものであつたらう。だが、士族の商法というか、なかなか先生の思うようには行か

なかつたようであつた。このお手紙にある「惠雨読方教壇」などは、同行社の苦しい台所を救おうというので、当時毎日新聞につとめておられた青山広志さんが、暇を作つては、先生の教壇を筆録されたものを集録したまさに天下一品のものであつたが、いざとなるところな風であつた。世の中はまゝならぬものである。

ついでながら、古田先生にお願ひしたところ、ことわりの手紙が来たのであるので集録しておくことにしよう。ちなみに古田先生という人は、近頃は年のせいか、自分の方からよく便りをくれたり、こちらが手紙を出すと、大てい返事をくれるのであるが、その頃は、有名な筆不精で、私などは十通に一度位も返事をもらつたらうかなどと記憶を呼び起してなつかしんだりしている。

御状拝見 前封の

裏見て簸川郡

とあり 天叢雲の

そこより

立のほるけはひうれしく

さて残念ながら

八月十九日から廿四日迄

本県初等中等部

門の仕事として

井上監修官の講

習をうける事に相

成居り小生がそ

の御案内をせねば

ならぬ役務とな里

そのため折角の

御申出をうけながら

行けませぬ 出雲へは

松江へ一度行っただけ、

もう一度行きたいと

思つて居り井上先生が

なければこんなよい機会はない

のですけれど

鬼に笑はせて来

年の事にして下さい

それまでには「おさらへ」

の下巻も出来上り

ませうから
七月一日 古田擴

青木清吉 様

かくて昭和十三年の夏は、たしか芦田、沖垣、岩瀬の三先生をお

迎えし、地元の中の教壇で三日間の教壇修養会、それも出雲教

壇修養会の第一回を今市小学校で行なつたのであった。

その後、松江での大会についてのお手紙が大分あった筈だが、ど

うも見つからない。

昭和十三年十月のお便り、松江大会直前のものを記しておく。

拜啓

兄を見るまじに

十日の後 島根

に放火した兄は

火元だ正しき道

のおこる姿を見は

まざく〜と見て微

笑禁じ難きも

のがあろうこの大会

をはらば 老生はも

う島根に要なから

む 少彦名を気取

つて「新しい国を開

きに」といふ考 二

十七日には朝はやく

急行で松江につく

つも里
頓首

十月十七日於大滝 恵

青木学兄、侍史

昭和十三年十月二十八、二十九、三十の三日間、待望の大会は、

島根師範付属小学校と、同校に隣接していた松江市公会堂を会場と

して、島根県空前の内容と会員を結集して開催出来た。丁度、漢口

陥落の提灯行列とも重なりはしたが。

芦田先生は「修行者と羅刹」をお扱い下さったし、井上先生六時

間、垣内先生六時間、それに芦田先生一時間のご講話は、満場の会

員に深い感銘と昂奮の渦を巻き起したことであった。

この会に三日間侍者の役をつとめさせてもらい、垣内、井上両先

をいただいたのも感激の極みであった。だが、今は三先生共にご他界になった。

埴内先生

雪片を手にして結晶の形象を見んとする時掌上にあるものは一滴の水な也結晶の形象を觀んとせば直下じきに觀ざるべからず

井上先生

道の辺に咲くや一本草草

久遠の命そこにみるかな

翌昭和十四年の夏には、何としても芦田先生を奉じて隠岐への窟願を果さねばならぬ。先生にお願いしたところ、あっさりご承知下さって、この年は、古田先生もおいで下さったし、とてもにぎやかな会であった。その上隠岐へは、当時徳島市加茂名小学校校長として、すぐれた学校経営をしておられた井村清先生も、あの寺内元師をほうふつさせるような堂々たるお姿をみせて下さったりして、井村さんの著書「道以前」どころか、こゝに道がついたのであった。それというのも、私のこのお願いについて、芦田先生からは次のようなお葉書をいただいた。もうこんなにまでの間柄にして下さったのかと、今よみ返しても、うれしいやら、ありがたいやら。

御状拝見夏の夕立のや

うに來かけたら來るく

せがついたと島根がいふ

かも知れぬ青木兄共

に隠岐に行かうか 惠

この年八月五、六、七の三日間の特色をあげると、尋六の「十和

田紀行」は井上先生のご依頼を受けられて、芦田先生がおかきになったものであった。そこで、私どもは、第一回に一時間、第二回に一時間、第三回に一時間お扱い願って、子どもを一時間休ませて、その後を古田先生に、「おさらへ」をやってもらったことであつた。

こうした強引な企画や実行などは、惠雨会ならでは出来ぬことで、今時には、通用しないことである。

この頃から、若い同志に富岡君というのがあらわれた。彼は小学校教員のかたわら速記を勉強し、こうした大授業や講演は全部速記してくれたのも、私どもの大きな誇りであった。

芦田先生のご長男公平さんが亡くなられたのが、昭和十五年四月九日午後四時五十分。先生は、ご長男に先だたれた悲しみと、同志同行社の経営一切を取りしきっておられた大黒柱に倒れられ、全く途方にくれたのであった。

弔問に上京した人たちによって、善後策がいろいろ相談されたらしいが、その具体的なもの、一つが、同志同行五月号即ち第九巻第二号に、特急「富士」の五号車にてと題して、青山広志さんと岩瀬法雲さんが具体的にいろいろ話し合われたことが載っており、その中に戦没勇士の遺書も入れてはという項があり、更に稿を更めて、岩瀬さんが「或る勇士の遺書」というの載せられ、その中に、「それにして、全国の同志の手には斯うした尊い勇士の遺書の入る機会も多いかと思ひます。お差支へのない所だけでも御見せ下さるやうお取計らひ願へないでせうか。必ず私共後輩を奮起させるものがあるかと思ひます。お願ひします。」

というのが出ていた。私も、同志同行社の一切を仕切っておられ

た公平さんがなくなれば、事務所は二男の共介さんの高商時代の同期生の神田の酒問屋一本の主人が、老舗一本商店の経営をたすけてくれぬかという懇請と、ついでには事務所を一本の二階にしてくれぬか、そうすれば、共介さんは両方の面倒をみる事が出来るがとのことで、一木移転の儀もまともり、更に同志同行社の経営をどうするかについて、先輩各位が芦田先生を中心として、ずい分苦心しておられることはよく知っていたので、岩瀬さんの企画についても論文をかくとか、隨筆をかくとかいうことはおいそれと容易には出来ないことであるけれども、戦没者の遺書ならばと岩瀬さん宛に送ったのが、私の甥春日義雄の「兵と共に生く」と「嫩江雜信」のりが版刷り二さつであった。この春日義雄というのは私の姉の子で、昭和八年に陸軍士官学校に入学し十二年六月に卒業し、旭川聯隊にいたのがシベリヤに移駐、十四年八月二十九日ノモンハンで戦死したのであった。彼がシベリヤ陣中においての手記を、兄で当時東京壘球学校につとめていた今西孝雄がりが版刷りにして、彼の部下の家族や近親の者に配ったものである。これが手許にあったので、こんなものでもお役に立ちましようかと送ったのであったが、折返し岩瀬さんから、これはバラバラにして数篇ずつ同志同行に載せるのはもったいない。何とか単行本として同行社から発行していただいで、広く青年に読ませるようにしたいが、どうかとのことであった。然し私としては、この企画は血のつながる者としてはまことにありがたいことではあるが、さなきだに苦しい同行社の台所を圧迫しては

と思ひ、姉夫婦と相談してそんなにまでしていただくならば、費用は全部こちらで持たせていただいで、同行社にご損がかゝらぬようにしていただきたいとお願ひしたのであった。その頃の岩瀬さんや

芦田先生との往復の文がたくさんあった筈だが、どうも見つからない。ちなみに当時はもう用紙は割當制で出版印刷の事業は大分苦しくなつて来ていたのであった。

昭和十六年七月八日付お便り

拝啓まことに御無沙汰平に／＼さて兵と共に生く大きい活字で組ませた処が二百頁の上に出て定価壹円ということにしました発行も遠かるまじと存じます 最初の発行三千部 つきましては発行部数千部毎に五十円を著者に納めることにしたいと存じます お父様やお母様はもと／＼營利目的の出版物でないからそれはこまるとおっしゃるかも知れませぬ しかしそれでは当方がこまる 出して万を以て数へる程いけばその時はまた格別

今の処発行部数を三千として考えなければならぬ 著者に対してお札申さぬといふも道でないから 一万部位までは千部毎に五十円として御承知下さるやう御親父様に御相談申してみ下さい

この書の流布には同志を動員して老生の力の限りつとめてみます 東京には今西様（註、私の甥で著者の兄）もるなざるることなり検印をいただくやうにするが間違がなくてよろしからうと存じます それとも老生の言を信じて（発行部数とし）検印の煩ひを省き下されても結構 いづれとも仰せのまゝに従ひますこれも亦御相談下さい 発行延引申訳がないがこれには老生のみならず印刷所にも問題があつてこゝに至つたのですよろしく御両親様におことわり申して下さい

教壇行脚をこゝで一旦打切らうと思ひます 身体に衰えを感じて来たしなすべき仕事はまだ中々多いから

同志同行はつゞいて出します これでは老生の心境を御覧下さい

年来なやみぬいた債務もいよいよ弁護士にかけて解決することにまで手順が進みました

或は破産の処分をうけるかもしれないがこれも身についている運命といふもの止を得ぬ兄にあつたら話が山ほどある

頓首

七月八日

芦田恵之助

青木学兄 侍史

続いて七月十五日付

けふはお盆の十五日 めづらしくゆったりした気持ち しかし何処となく東亜の情勢の切迫を感じます

いま春日大尉の遺著の校正を全部(初校)をはった処です 御法事の間にあはせたいと気をもんでます

いよいよ出来たらこれが流布に全力をさげます 高い広告料など出せないから同志の力にすがって

青年学校のよみものとして

では一万部までは千部について五十円づゝ納付のこと一万部以上はあらためて御相談申上げます

出来次第御送付申上げるが何処へ何部といふことを御知らせ下さいませ

老生が兵と共に生くを一字のこらず校正したこと身の面目と存じます

七月十五日

頓首
芦田恵之助

青木学兄 侍史

金は送ってもらはなくて

納付金でつぐなひます

戦局はいよいよ急を告げ、内閣の更迭等々異常すぎる程異常な空気の中之で出版。東京には甥の今西孝雄もおりますし、校正等何でもお手伝い申上げますと、いっておいだのに、老先生ご自分で初校をおやりいただいたとは全く勿体ないことであつた。私も関係者は全く感泣し、私が夏休みになって学校の用事を片づけて七月末お礼やら何やらを兼ねて上京し、駒込林町のお宅へ伺つたところ、何となく異様な空気があつたのにびっくりしてお伺いすると、かねてからの問題であつた債務のため、昨日家財の競売にあつたことであつた。それから、当時はもう移動していた神田旅籠町の一本ビルの二階にあつた、同志同行社で、冲垣先生や安田孝平さんにお会いしていろいろお話を承わつたりしたのであつたが、同志同行社の名物男三ちゃんこと萩原三郎君もまだ健在で何彼と世話もしてくれたのに、あんな小さい男がまさかと思つていたのに召集され、戦死してしまつた。おしい男であつた。

八月十八日付

拜啓先般はわざ／＼の御東上にごたく／＼してゐてゆる／＼お話も出来ず失礼致しました

兵と共に生くやう／＼出来ました

慾をいへば涯限もないことだがまづ／＼上出来 ことに辻香境先生の書と画これは天下一品 赤線二本の間は何を見るか 曰く赤き心日本精神 うまいだらう 伊彼野村の春日様にはともかくも百五十部、これは印税として。他に数部謹呈のものを贈つたことと存じます。三千部の印税はこれで済みとしてあとは増版毎に御希望によつて本なり金なり送ることと致します 兄にも何冊か送つたことと思

ふ 先般は結構なる食料品多数にたまはりありがたく厚く御
礼申上げます

雑誌統制問題で目下四苦八苦廢刊の止むなきに至った仕様がな
い その上の同志の連絡をどうしたらよいか御一考お下さ
い

同志の面々によろしく

頓首

八月十八日

芦田恵之助

青木学兄 侍史

やがて、同志同行社の生命であった雑誌同志同行は、昭和十六年
十月一日付、第十卷第七号をもって廢刊のやむなきに至った。こ
うした苦しい時に、芦田先生が、甥の遺著を刊行して下さったのであ
った。その第一版は八月十日付である。雑誌廢刊の二月前のことであ
った。昭和十四年八月二十九日ノモンハンの花と散った故人の三
回忌には、彼の遺著は教育書出版社である「同志同行社」の最後の
出版として奇しき因縁によって供えることが出来たのであった。

芦田先生が、この書を極めて高く評価して下さったことは、その
序文をお読み下さるとおわかりいただけるのであるが、それは長く
なるので、雑誌の表紙裏にお書き下さったおことばを記してご推察
をお願いしたい。

○故春日大尉は出雲の人、ノモンハンの激戦に於て、殊勲甲に輝
く散華を遂げた人である。年僅かに二十五。

○「兵と共に生く」は其の著に自ら命名した題目である。同時に
それが大尉の生活様式であった。自己をこゝまで育てるのに

は、その座右の銘「鉄の意志、死の忍耐、水の決断」があづか
って力あると思ふ。

○私は此の書を原稿で一読、自己を育てた記録と見た。再読、教
育の真髓だと見た。三読、著者は天成的教育的武人の偉人だと
見た。

○「兵と共に生く」は、「兵と共に死ぬ」人でなければいへない
ことだ。試みに「児童と共に生く」と置きかへてみると、我等
にはその尊さがわかる。

云々

私は、こゝまで書いて来て、しみじみと芦田先生の偉大さを想う
ものである。この文などは、感激をもって幾度読んだものかわから
ない私である。けれども、しよせんは文を読むとは自己を読むもの
であると、こんど程しみじみ知ったことはない。「兵と共に生く」は
「兵と共に死ぬ」人でなければいえないことだといわれ、その当時
はなる程そうだと一人合点していた。「児童と共に生く」と置きか
へてみるということも、自分も生命がけで、児童と共に生きる日々
をくり返していると自負もしていたと思う。だが、児童と共に生き
るとは児童と共に死ぬことであると、果して心のそこから思ってい
たことであろうか。私には妻子があった筈だ。そうかんたんに死ぬ
る筈がない。人間は得てして、ことばをおもちゃにしてそうと気づ
かずにおることが多い。私は、今しみじみと、北畠親房が「神皇正
統紀」の中で、「乱臣賊子の生ずるは、もとことばと心をつつしま
ざるところによる」という意味のことをいっていたことを思い出
す。

毎日の生活に、身命をかけ、職をかけて当るといふことは、口で

いうことは極めて簡単容易ではあるが、至難なことであるということとを、今しみじみ想っている。

さて、雑誌「同志同行」が廃刊になると、私どものように弟子の端くれでも、先生はどうしていなさるだろうか、或は同志の動静はなどと心にかゝることも多いのだが、こゝ十五六年の間旅にあげ旅にくれた生活をしておられた先生は、全国に散在している弟子の身の上など思われると、とてもじっとしてはいられなかった。そこで一月からの全国の同志訪問の旅がはじまった。私の手許にあるのは一月十四日付で、甲南学園初等部から発信されたもので、それには、一月から三月までの日程表が添えてある。

拝啓四月の下旬頃から徳島高知島根鳥取福井富山新潟辺を一走りようと思えます島根に限り大社詣 古稀祈願のこと その節春日様（註春日義雄のこと）のお墓にもおまゐりしたいと思ふいつれその節には

雑誌たふれてはじめての西の旅感ことに深し 日野兄によろしく
頓首

一月十四日

青木学兄 侍史

その後も、一月に二度はお便りをいただいているのであるが、どうも見つからない。

今あるのは、多分四月中旬と思われる。

厄介者のまひこみよろしく御願ひ申上げます すべて御むりのないように 兄にあひ春日様の焼香心からの願いです兄との話は一夜ではつきまい

先生のこの度のご旅行は、いつもの行脚とは性格もちがっていると考えたので、私は私の家でお泊りいただくことにしたのであった。

先生は昭和九年のたしか九月に奥さんをなくされ、又長男公平さんにも先だたれて、内面非常にさびしく暮らしておられた上に、日常のご生活が旅から旅で、お宿も旅館のことが多く、家庭的な味を求めていなさるのではないかと思つたからであった。

尚この度は、私のつとめていた出雲市今市小学校の教頭で出雲恵兩会の事務局長をしていくれた、日野勤兄が、校長に出ていたので、よい機会に自分の学校へも是非おいでただいて、ご指導下さるようといっていたし、私も、とうとう今まで先生に私の授業をご覧いただいてお教えを受けたことはなかったで、これも是非と思ひお願ひすることにし、他はあまりお疲れにならないように取計らかったのであった。何分戦前の数え方で七十才とは古来稀なりという古稀であったから。この頃の先生の服装は国防色の国民服甲号に国民帽、それになつかしいあのトランク（これはたしか岩瀬法雲さんがもつて修理してもらつておられる筈）ではなく、リュックサックを背負つておられた。そうして忘れてならないのは、この年の秋頃には、渋沢敬三子爵が日本民族博物館、それもいろいろなものを含む内に飾るといった小っぱけなものではなく、数千坪の敷地に日本の代表的民家を移築するといった構想の第一着手として建てられた武蔵野の草葺の家があつたがそれに移られることになつていた。これは、保谷町下保谷にあつたので、先生は保谷草庵と名づけておられた。ちなみに、渋沢さんは東京高付小での教え子であつたそうである。そんな関係で、昭和十七年十二月末に行われた芦田先生古稀祝

賀会は、故栄一子爵の飛鳥山の別荘を会場とし、発企人にも名をたねておられた。ついではながら、この頃はもう大東亜戦争がはじまって一年あまり経っていたし、東京では牛肉の顔など全く拝めないといった時であったので、全国から酒や肴を持ち寄ってのお祝いで、私も蒲鉾など持って上京したことを覚えてゐる。

さて、私の家をおたちになった先生は、鳥取師範付属校へは寄らずに、ご郷里の竹内にお寄りになった。

この頃は色々御芳志多謝五つも泊めてもらって御一族の方々にもお目にかゝり満足これにすぎず

さて故山に帰って故人乏し　されど大地はむかしながらにして
山河にこやかに我が幼時を語る　大なる師の前にをしへをつくる
の感あり　おく様によりしく坊にもよろしく

同志の方々にわけて一々よろしく

頓首

青田恵之助

六月二日

青木学兄　侍史

来訪者多く明日は　出航と古事記の話

明後日も同様　明三日は　やや大なる

会らし

続いてご帰京になってからのお便り

拜啓

この度（この文字読めず当て読み）は五つもとめていたゞいてあ
りがたう存じました

御迷惑をかけたが私にはよい思出でございました

草庵の手入まだ一向にはかどつてゐませぬ明日から乃公出かけて

便所建築屋敷の草取等々自分のことは自分でやります

御手数を煩はした製本　いただきました品　一先づ東京市本郷

区駒込林町二七の自宅へ御發送おきをお願い申上げます

昨夜帰京致しました

おく様にも坊にもよろしく

頓首

六月十九日

惠　雨

青木学兄　侍史

この製本というのは、かねがね私がお贈りしていた出雲民芸紙の封筒、巻紙それに便箋が大変お気に入って、この春、先生から自分も、もう大分の年だ、いろいろ残しておきたいことを書き留めておきたいから、出雲民芸紙で和綴の帳を作ってくれぬかとの依頼が来ていた。私はいろいろ研究した結果出雲独特の紙で虫に食われず、渋くて気品のある雁皮で、今は無形文化財人間国宝に指定されている安部栄四郎さん手漉の紙を使い、その頃松江にたった一人いた和綴の製本師を見つけて、この紙二千枚で二十冊作らせてさしあげたものである。これは先生に大変気に入られたし、渋沢敏三さんにもほしがられたそうであったが、戦争がきびしく、世はあげて食糧増産の時代に入り、こんなせいたくなものを作る餘裕がなくなっていたので、だめであった。品というのは、私の姉夫婦がさきに「兵と共に生く」をご出版いただいた記念にと、作らせた出雲名産「八雲塗の文箱」と出雲恵雨会が古稀のお祝にさしあげた八雲塗の硯箱のことである。

こうして戦争はいよいよはげしくなり、私どもは校庭をたがやして甘藷と麦を作り、又勤勞奉仕に明けくれて昭和十九年八月の末となった。私は県庁に呼び出され、いや成なしに、山の中の青年学

校長に任命されたのであった。このことを先生にお知らせしたので、対して、

兄のところへ手紙を出さうと思つてゐた矢先へ兄の御状不思議だなあとしばしば見とれてゐました。いよいよ青年学校に進出はまり役はまさに切つてくはせたやうですが、やはり未練は国民学校にあるだらう。老生も何だかをししい感がする。

しかし兄は青年学校むきだよ、からだをこはさぬやうにしつかりやりましたよ。私が兄に手紙を書きたいと思つた用事は十一月の下旬から十二月中旬位までのうちに、郷里丹波をふり出しに鳥取島根をあるいて、岡山に出て高知から徳島を経て東京に帰る予定。

志すところは旧知を訪ふにあつて教壇はのぞまるればやる程度、いつ敵機がやつて来るか知れないのだものあすの予測は誰にもつかぬ。老生も雑誌はなし著書はなし。ただあるものは少々の旅費と足とにだ。これをさげてあるいてこの戦時下に私の一分が立つやうにしようといふのだ。島根は君にあふだけでもよい。御迷惑だらうが多少は新聞題もある聴方からはいる。国語教授は、青年学校にたちまちきよめがあるかと思ふ。一つ考えてみてこの十四日まで返事がきかせてほしい。それで秋の日程がきめたいのだから、ひどくなるやうだが、がんばつて戦ふより外にみちがない。国民すべてが

九月三日

青木学兄 侍史

おく様によろしく

坊は元気かね

このお便りをいただいて、私は早速おいで下さることはまことにありがたいが、何分私が赴任した学校は山の中で、汽車を降りて上

頓首

惠雨

り二里半近くも歩かねばならぬところなので先生にはご無理だから、私が下山してお目にかかりますと申上げたが、いやお前の学校へは是非行きたいからおっしゃつて下さつたので、私の借家といつても、応召軍人の留守宅を二間だけ借りていたのであつたが、そこへお迎えしたのが十二月中旬であつたかと思ふ。家内は先生の待ち受けに、近所で糯米と小豆をわけてもらつておはぎを作つてお茶を受けにさしあげたところ、こんなばた餅があれば、一皿（小さいのを二つか三つ盛つていたと思う）、三円で行列が何町と東京では続くだろうとおっしゃつたのでびっくりしたのを覚えてゐる。何分私の月給が九十五円の時のことであるから。それから後もお便りの度に、ぼた三両あの味は忘れられぬと書いて下さつたが、惜しいことにその頃のお便りが一つもない。この時私は国民学校へたのんで、私の長男が二年にいたので、長男の学級を先生に指導していただいたのであつた。

下山の時は、途中から氷雨にふり出され、頭から外套から地下足袋まで、ずぶ濡れとなつた。先生のおからだにさわりはしないかと心配したが、風邪をおひきになつた様子もなく安心したが、惠雨ならぬとんだ憎い雨に見舞われたのであつた。出雲から高知の中山卯月氏を訪れるといつておられたが、この頃敵機の来襲がひどくなつたので、私方から中止の葉書をお出しになつたのも記憶にある。

私は、昭和十九年九月から山の中の青年学校で、私なりの想いをこらして、青年を中心とした社会教育といった方面に情熱を燃やしていた。

ところが、昭和二十一年十一月突然県庁から呼び出しがかつて、とうとう役人生活をせねばならなくなつた。赴任したのは、飯

石地方事務所という、国道五十四号線によって貫かれていた広島県境の鉄道というものは、一米もないという中国山地の郡であった。私は性に合いませんからと、かたくことわつたのであったが、当時の教学課長から、性に合うとか合わぬとかはやってみてはじめてわかることだ。皆さんがあなたをすいせんして下さっているのだから、性に合うか合わぬか一つやってみて下さいませ。その上でいよいよ合わないということなら、いつでもかえてあげますからといわれると、引受けざるを得なかつたのであった。

さて、赴任してみると、その頃は教員の適格審査というのがあつて、教員の教壇追放などという全くなつていないことで、いやなこともやらねばならなかつたし、忙しいことも目がまわる程で、私も視学事務をやる者を先ず再教育せねばならぬというので、十二月はじめ広島県賀茂郡西条町の農学校かの寄宿舎に、中国五県の全員が召集鑑詰にされて二週間、底冷えのするとても寒いところで、何でもないことをもつとむらしくかさされ、やっと帰つて来ると、昭和二十一年十二月二十七日だつたと思うが、六三制の学制改革が閣議で決定され、その準備打合せに、再々県庁に呼び出される。その年は二米近い雪が降つて、バスは長い間不通で、五里の雪の山道を歩いて汽車というものの通っている駅まで出ねばならなかつた。何のことはない一日の会議に三日かゝるのである。このようにして、たつた三ヶ月で学制改革の実施を一段落つけて、ホツトしている。昭和二十二年四月には能義地方事務所というのに転勤である。全く忙しいことで、その間には二月一日のゼネストさわぎもあつたり、芦田先生との交渉についてもあまり記憶がない。

昭和二十二年私が能義地方事務所にかわる頃にいただいたお便り

青木兄おいそがしいでせう私は時々兄をまぶたに糸がいてみて兄が山ごもりの無意義でなかつたことを思ふだらうなどと思うよ寒い雨にぬれつゝおもしろ外套着て駅についたことをなつかしむよ今年には教壇を副として同志との座談を主に 母の会などに手をつけてみようと考えてゐる 私も今年には七十五今後生きてゐるとしても年々兄にあふという都合にもいくまい ついては今年は一二月何としても兄が視学官ぶりを見たいと思ふ二日を兄のところにあてておくから とめるだけとめて下さい 初等教育の低流に敵として真実をまつてゐる同志をこの際低平仲間には確かと知らせておかなければならぬと思ふ

この度の旅だ兄が来るなどといつてもいく二つとめて下さい 出雲は何としても兄の天下だ 五月の中旬にならう おく様に今年は牡丹餅一皿四十円とつたえておいて下さい

四月十九日 頓首 惠雨

青木 学 兄 侍史

持つべきものは師匠である、この時位しみじみ思つたことはなかつた。視学などというものについては、今時の人はあまり知られぬだらうと思うが、何分教員の人事権を持っている職務者である。一歩間違えば、傲慢不遜な権力の鬼と情落してしまいがちな仕事である。とにかくむつかしい仕事であるし、私もそうであつたと今思つている。そんな仕事についた私に対して、それとなく愛の手をさしつて、あやまちなからしめんとお考え下さつた、慈悲の心を限りなくありがたく思つている。その頃先生は、道元禪師のことばをとつて「低平」という雑誌を出しておられた。

かくて、私は管内の今は安来市になっている宇迦莊小学校といふのにたのんで会場を引受けてもらい、更に私の宅でも一夜お泊りをいただいたのであった。

九州を一周して山陽に帰って来ましたがつては色々御芳志をいただきありがたく御礼申上げます。帰京は七月十二三日の頃と思います。勝部様によくおく様にもよろしく。頓首

六月三十日

文中勝部様とあるのは、当時 課長補佐としていろいろ世話をしてくれた、勝部正人君のことで、彼は現在、山中鹿之助の能義郡広瀬小学校長をしている。

昭和二十三年七月十八日付

暑くなりましたね。千両まさに安着多謝兄と老生の間柄ではわびもへちまもない。今度九州一周は意外の不当利得で世のかはり方がたゞ事でないと思をまるくしました。御手数をかけましたことを厚く感謝致します。この夏は七月二十一日に東京発埼玉をふり出しに青森の津軽地方安田と同行。八月に入って青森県南部鈴木と同行か。岩手にて森先生と相会して講習帰途福島県土湯温泉で湯治かたがた講習執筆。帰庵は八月末になるが。とにかく先の見通しのついてゐるものは一日で

もかせぐが肝要と命がけのいたらく俗の俗なるものと笑ひたまへ。森先生はいはく「青木さんは(兄)お弟子の中の型破ですな」と老生これに答えて「二宮——宇和島和霊の校長、森先生よく御存じ——死して以来の一人じんです。この頃めつきり器量をあげました」

と十一日の晩に大きなくしゃみをしただらう思い出して見たまへ。

適格審査のこと考えてみて下さい

障子紙九月はじめ頃までにたのむ金はおくるから。半紙型の障子だからおく様によろしく。

七月十八日

青木 学 兄 侍史

恵 雨

この頃は、教壇に立つて子どもを教えるためには、規定の教員の資格審査を受けて合格した者でなければならなかった。芦田先生はそれを受けておられなかったので、昨年おいでになった時、私が是非島根県でおうけになるようにおすすめていたのであった。しかし、先生はとうとうお受けにならなかつた。思うに、先生の愛弟子、北海道小樽市緑小学校長沖垣寛先生が、不適格の烙印を押されたことなどが、心のひっかかりになつていたのでなかるうか。

はじめの、千両まさに安着とあるのは、何のことかとんと思ひ出せない。何か先生にたのまれていて、それが出来ずお返ししたのか

或は昨年五月にお出で下さった時のお礼を失礼していてお送りしたのかもわからない。どっちにしても大したことではなさそうだ。

続いて昭和二十四年一月九日付

適格しばらく見合はせよと沖垣君がいふまゝに

山陰はなつかしい青木兄よい年をむかへ

ましたかね おく様は 坊は 老生八十

五日の旅に昨年ほどはりきった気持でと

ほしたことはありません 中々に住みう

き世になって来たが 兄は何かと人のた

めに心配して苦しんでゐることだらう

老生やっとな教育の曙光をみつけた感じ

で割合安んじた気持でゐます 今年は夏

秋の候に山陰をかけます 兄とさしむか

ひで語りたいためにおく様によるしく

試筆お笑い草に

頓首

一月九日

惠雨

青木学兄 侍史

あの美術帳の

一部つかって残つてゐる部分をほぐしたのがこの紙です 元目からけふまでこの紙と首っ引き来年の試筆用十五帖ばかりどこかで見つけておいて下さるまいか金はいくらでも出す

やっぱり適格審査を見合わせられたのは、沖垣先生の注意からであつた。

続いて、私が昭和二十四年四月、郷里に近い鏡川郡莊原小学校長に転出したことを報じたのに対して、五月三十日付で

青木兄、兄が小学校を去ってから今日まで

島根に対しては可なり淋しい思いをしたよ

莊原に帰参が叶って私はこの上なくうれしい

これからは島根郡莊原といふ風に考える自由を与えられたように

思う 十月にはあひにいくよろしくたのむよ

兄はおしもおされもせぬ大校長だ

よき傘下を育てて教育の本質的活動を開始したまへ

肚なき者に出来ぬ教育をして世に示したまへおく様によるしく

五月三十日

その秋いよいよ、先生が私の学校へおいで下さることになった。

十月八日付で、鳥取県の同志で今はなき小関公雄兄宅から

十四日晚準急で松江か今市につきたいと思ふ

その夜何処かで泊めてくれませんか 松江の大火失念とんだ御心配を

かけて申訳なし 兄の顔を見たら出雲をとおりぬけてもよし

この度は私の宅でご一泊を願ひ、十五日は私の莊原校で指導をいただいた。この日は私が赴任して、七月に結成したばかりのPTA

Aにもお話をお願いしたのであつた。その夜私は、莊原にひなびた冷泉を温める湯治湯があつたので、そこへご案内したら、大変よろ

こばれた。私は、先生が以前好んで滞在して執筆にいそまれた、玉川温泉友松庵を想像してのことであった。この時、先生はしみじみと、近頃子どもの発表を尊重するといったり、自分の意志を発表する能力を伸ばすというので、とてもおしゃべりな然も排他的ともとれる子どもを育てているが、これは教育の本道ではなくて、先ず他人の言をきいて、これに対して答えるというところから出発すべきではなからうか。話し方教育は、聞き方教育からはじめるべきだと思うがのう。としみじみ語られたのであった。

又、私はこの度は先生があれ程よろこびになった、出雲民芸紙の安部栄四郎さん方へ是非ご案内申上げたいと、かつて視学時代の同僚で隣の宍道小学校長をしている、船木栄君が視学に出る前安部さんの岩坂で校長をしていたので、船木君を通して安部さんにお願いしておいたので、一日、船木君に案内をたのんで、松江市郊外岩坂に安部栄四郎さんの工房を訪れ、岩坂の宿にお泊りいただいて、安部さんにもおいでいただき、ゆっくり安部さんの生いたちからの、ご苦心談等を伺うことが出来たのであった。

そこで、先生の試筆用の紙をお願いしたところ、安部さんはご承諾下さって、手漉きの色紙を作って下さることになった。

秋になって色紙をお送りしたところ、殊の外よろこばれて
出雲趣味にあこがれて兄を煩はすこと

このたびで三回 最初は二拾冊の飛び切
帳面、これは現に拾冊余をのこす。喜寿

の年の日記と知己名(同志名)を記録し
て長く家宝としようと思ふ

次は障子紙を頼んだところが「今時半紙

ばんの障子紙などいふものあるか」と兄に叱られてあつての生すきの半紙をふんだんに送られた。それを昨日ついたでゐるところへ兄からのおはがき 感ことに

深し三回目がこの度民芸紙二百の願ひ
価格予想の半額多謝 五五〇おくる五〇
は送料 この春には旅行日程上民芸紙は

用いず大分の同志から送られた唐紙八分
の一、四〇枚で間にあはせ喜寿の満願、
日本廻国の終結、即ち二十五年の春に

同志への御礼に用いようと思う御下命の
宍道校長にはその唐紙をおくるが安部先
生の宿所御一報たまはりましたし おく様
よろしく この秋には必ずいく 頓首

十二月二十四日 恵 雨
青木学 兄 侍史

続いて昭和二十五年一月九日付

恭賀新年

昨秋は特にお世話になりましたね多謝

老生この二十日より

兵庫県氷上郡竹田村

下竹田 法 楽 寺

に仮住して筆に親しみます時々情報する
からよろしく御願ひ申上げます近くなる

のがなぜかうれしい 頓首

一月九日 惠雨

青木学兄 侍史

この紙兎のたもふところよ

一月二十二日付 おはがき

青木兄、丹波仮住の第一夜はあけた
思うことが多いよ、これから自炊の
寺住居、老生の誰にもさまたげられ
ぬ眞骨頂が出るよ、本當の仕事だ近
くなつたから年に一度は会はうねお
く様によろしく坊は元氣か 頓首

これが法楽寺第一便であつた。

法楽寺に仮住してから兄の御状が老生の
氣持ちに一番ひたりした 三月三日ま
た法楽寺の閑栖を出て大阪九州の旅に上
る四五六の三日大阪府守口市滝井小学校
で惠雨引退興行をやる 頓首

滝井小学校はたしか、先生が大変かあいがつておられた武藤甚太郎兄のいる学校だつたと思う。

一月三十日付

小宅に来て兄を思ふ
揮毫忘れてゐるのでは
ないがいがしその中に。
来年五月のはじめか四
月下旬に山陰を一走りする

続いて四月十三日付で次のような依頼状が来た。

青木兄 今度はやられるかと思つたよ
大和で病んでやつと森先生のうちにつ
いてたふれた風をおして月ヶ瀬の桜を
見ながら病勢急変 肺炎、心臓性喘息
腎臓と三病併発それで急性ときたから
全くまいつたよ仰臥約二十日やうく
死出の旅路の延期出願許可というこ
ろまでこぎつけて去る三月三十日丹波
竹田まで試運転 三十一日から法楽寺
入り独住の生活に帰って目下まづく
さしつかへなし もう大丈夫御安心下
さい

さて死なないうちに惠雨自伝上下二巻
まとめておきたい上巻は大体出来た下
巻は二十五年の教壇行脚の記録だこれ
は前代未聞の珍物だ ついては島根は
兄に引っぱりまはされたという形にな
つてゐる。そこで西浜に兄がつれてい
つた時から、今市富山能義鍛川とつれ
あるいた学校その大体の年月、能義は
山中鹿之助^④君をたづねていったことが
あるのだその年月は今度荒浜（註荒島
になつ中学校長の誤）た高宮桂思君に
たのもうかと思つてゐる何でもかも
兄の老生に関する記憶を全部かしたまへ
発行は何年何月か

兵と共に生くも一春日大尉こゝで

も一度熱をあげようじゃないか青木兄
協力をたのむ

中沼君か飼牛君にあった時 隠岐の夏朝

講習は何年だったかきいて教えて下さい

(註 先生はいつも山中公とよばれ、去る昭和十二年はじめて先生
を広瀬にご案内した時、観迎会の席で、芸者が、あの鹿之助
とうたったのに、かりにも他国者の私が公と呼ぶ人に対し
て、宣伝のためとはいえ無礼であり、金もうけのためなら手
段をえらばぬとは、とふんがいされたのであった。)

この手紙に添えて次のがり版刷りの依頼状が入っていた。

拝啓 何かとお忙しい昨今でございますよう

その兄に次のようなお願いは恐縮ですが一世一代のこと特に御協力
をお願い申します

- 一、恵雨自伝の前編は私の行動を主として時、場の順序を追って
記してみました これはうまくまとまったかと思えます
- 二、さてその後編教壇行脚二十五年を時と場を追って書いたらお
そらく見るにたえないものになりましようもし之をその地方
の同志又は有力なる結束を中心として重ね写真のようになが
め それを私の主観でまとめたら教育人国記のような趣きを
呈するかと存じます 私はこれを是非仕上げて この前代未
聞の教育運動を後に伝えたいと存じます兄の御記憶を少々貸
して下さい
- 三、特に左記についてよろしく

- 1、あなたと最初の因縁 その後の著しきことも
- 2、あなたを中心とする同志諸兄弟 あなたの団体と過去に現

在に気脈を通じている同志又は団体

3、思い出の教育会合、教育祭、旅行 教育笑話等々 私も大

体は記憶しています

4、正確なる時は必要とせざれども何年頃の春とか夏とか位は
知りたし

5、後継者と見る若人の動きなるべく氏名も知りたし

4、著書は一気呵成を要とす なるべく早く早くお示し下さい

兵庫県氷上郡中竹田局区内法楽寺

昭和二十五年四月一日 若田恵之助

青木学兄 侍史

このお便りをいただいて、私は約一週間位はかゝったのではない
かと思うが、資料をまとめてお送りしたのであったが、「恵雨自
伝後編」はついに世に出ないで終った。これはかえすがえすも惜し
いことであった。

私のこのご報告に対して早速下さったはがき、大変ほめて下さっ
てやゝ面はゆいがかゝげることにする。このように若い者を引き立
てられるところに、先生のお人柄があり、そこからじみ出る教育
的方法の根本があったのではなからうか。私の最初は「教式と教
壇」の序文であった。

おいそがしい中にありがたうございませう

た 兄の文には老生はいかされる 別に

うまいともおもわぬが 何処かに真実の

通ずるところがあるのだらう もう一度

例の温泉にいつて死にたいね 坊はやっ

ているかね おく様によろしく御令兄春

日のおおね様によろしく 頓首 五月五日

このように、例の温泉といつてなつかしんで下さっていた、湯の川温泉において願うことも出来ず、翌二十六年なくなられたのは、心残りのすることであるが、これもいたし方ないことであった。

更に同年十月の終から鳥取市で、中国五県のワークショップがあったので、私も参加することになったので、研究会が終り次第法楽寺をお訪ねいたしたいかと、ご都合を伺ったところ、

おく様によろしく

あの礦泉で朝から酒のんでよたったね

鳥取まで来てもう一歩足をのばさぬと

いう法はない かならず来たまへ小関

兄もさそってやりたまへ 林 青木

小関芦田くだまかぬ程度にのめばおも

しろい

頓首

こゝにある林というのは、私の同期生で、当時鳥根県教委の益田教育事務所長をしていた、年来の同志林光博君のことである。私どもは、研究会の終った日に、鳥取で小関君ともう一人、どうも名が思い出せぬが鳥取の同志と合流して、日がとっぷり暮れた丹波竹田駅にいたのであった。駅には、法楽寺という提灯を持って先生の甥御といっても、お年はあまりちがわぬそうであるが、依田敏夫様が出迎えて下さった。同勢五人となった一同は法楽寺の石段を登ると、先生がにこやかに迎えて下さり、本堂に向って右のはなれの先生の居間に招じ入れられ、先生待ちうけのたしかハマチであった

と記憶するご馳走に、高浜虚子が命名したとかいわれる、銘酒「小鼓」をしたたかよばれたのであった。

翌日林君は、教育委員の選挙のことがあって帰り、私は彼を福知山まで送って、又もう一泊したのであった。これが私の先生にお目にかゝる最後になった。

私の手許にある最後のお便りは次のものであるが、この後も、私が庄原へ赴任して最初に行なった昭和二十六年二月の二日間の研究会のこともご報告申し上げ、その席で、私が発表しようとした「私の思念する平凡な教育について」という原稿もご覧いただいて、ご指導もうけたし、ご激励もうけたのであったが、今それが見つからない。

鳥取駅からの御状多謝

法楽寺の御りやくはたいしたものだらう

残肴やう／＼尽きて淋し はるかに兄を

思ふこと切なり 教育の本質に叶ひたる

研究会をやりたまへ 諸先生方によろしく

頓首 十一月八日

(鳥根県恵雨会会員)